

質疑応答・ディスカッション（議事録）

1) ラボ長講演及び開催地プレゼンテーションに対する質疑応答（1 日目）

発言者 (敬称略)	発言要旨
研究生 (大林)	長谷川先生にお伺いしたい。ネットワーク資産の把握のため、NaDeC BASE でビーコンを使用して測定を行った結果を踏まえ、イノベーションが起きる場所や属性を踏まえると、年齢層、性別、職種といったものが、どのような感じで重みを利かせてくるのか。また、この年齢層のこういう要素を持つ人たちが集まると、何かが起きる可能性が高まる等の研究や事例はあるのか。
長谷川 ラボ長	長岡市の場合、学生の協力が多かったという事情はあるが、一般の方も結構協力してくれた。2つの施設で、それぞれ200名を超える方に協力してもらい、6か月間計測した。 どういった方が入るとイノベーションが起きやすいのか、交流が変わったのかについて、長岡市の場合は先ほども触れた地域おこし協力隊の方がキーパーソンとして交流の中心になっていたということが明らかである。29枚目のスライドで紹介しているが、旧 NaDeC BASE では青い丸がまさに地域おこし協力隊の方で、現地で人と人をつなぐ役目を持っていた。そういう方がいると、交流が促される。 また、色々なことに興味を示し、様々な人に話を聞く、学生とつながることによって、学生がハブになっていくということも出てきた。 イノベーションサロンでは、起業相談を受ける方が交流のハブを担っており、色々な情報を持っているので、「こんなことをしたいんだけど」と相談すると、「こんなことをやっている人がいる」と紹介もできたりするのではないかと考えている。 色々な方の話を聞く方がイノベーションのキーパーソンになるのではないかと捉えている。
研究生 (大林)	松木課長にお伺いする。まちなかを歩くと、商業施設はさびれた印象を受ける一方、まちなかに居住する方が多い印象を受けた。マンション等に居住する方は市内在勤の傾向が強いのか。また、中心市街地に公共施設が集約されているということであるが、市民からの反対はなかったのか。
長岡市 (松木)	再開発を機会に、大手通りなどまちなかに新築のマンションが目立つようになった。人口数自体は少なくなっているが、減少率で見れば全市に比べると少ない様子である。勤務先については詳細に把握しているわけではないが、市内外いずれも働いている方がいると思う。 中心市街地に公共施設を集約することに対しては様々な意見があったと承知している。中心市街地を活性化することを通じて、市全体に効果を波及させることを今年度からスタートした第4期計画でも目指している。
研究生 (大林)	門脇課長にお伺いする。ファーストペンギンプログラムに関心がある。行政としてどの程度補助を投下しているのか、失敗する場合もあるのか。

発言者 (敬称略)	発言要旨
長岡市 (門脇)	ご指摘のとおりリスクはある。開始当初、1,000 万円の設立補助を設けていたが、現在ではリスク管理を重視する観点からも、数十万円単位の補助としており、その代わりコーチングを通じた支援を重視している。
研究生 (大林)	資金的支援ではなかったとしても、これだけ参画する方がいて、伴走支援を行っていることは理想形だと感じた。
研究生 (石川)	門脇課長にお伺いする。サテライトオフィス誘致について、当市でも関心はあるがうまく取り組めていない。どのようなメッセージを打ち出しているからここまでの成果が出ているのか、お考えを伺いたい。
長岡市 (門脇)	他の課が管轄しているが、誘致コーディネーターが都内に常駐しており、企業側の情報やニーズの吸い上げを行っていることも大きい。
研究生 (石川)	当市にも同じようなスキームがあるので、ぜひ共有して活かしたい。
研究生 (片岡)	長岡市のお二方にお伺いする。中心市街地では、いわゆる新旧住民による「対立」のようなことがあるのではないかと想起されるが、長岡市ではどうか。また、まちづくりのゴールについてイメージがあれば、個人的意見で構わないのでお伺いしたい。
長岡市 (松木)	現在のまちは戦後に出来上がったという特徴があるまちであり、新しいことやものを取り入れることにそこまで抵抗はないと思われる。 まちづくりのゴールは難しいテーマである。長岡市は公共施設を中心市街地に集約しており、ミライエも来年東館が完成する予定であるが、今後は民間の投資拡大も期待しており、宿泊や業務需要も高まりつつあるため、そうした施設の再開発が進むとよいのではないかと期待している。
長岡市 (門脇)	地域住民と起業された方との関係性について、商店街などの既存の事業主とも上手に関係性を構築していると聞いている。
長谷川 ラボ長	まちづくりのゴールは難しいテーマである。長岡市の様子を踏まえると、いわゆる「エコシステム」が成立することが一つの姿ではないかと考える。
研究生 (秋葉)	ミライエの隣の建物は民間主導による再開発を期待しているということであるが、行政サイドの意見を反映させるような仕組みはあるのか。また、「イスダス文明」について、長岡造形大学が参画したきっかけを教えてほしい。
長岡市 (松木)	再開発について、施設の権利を持つ行政と民間事業者による勉強会を開催している。行政としては、中心市街地活性化基本計画にも記載しているように女性や若者にとって魅力的な働く場所の確保を掲げており、そうした機能を持つ施設ができるとありがたいと考えている。 イスダス文明について、長岡造形大学の研究生による取り組みであるが、詳細は明日の渡邊先生の発表の中でご紹介する。まちなかにいわゆる「えんがわ」のような場所があるとよいという声をよく聞くが、公共施設のいすなどの補完的な機能も発揮していると思われる。いすにはノートが置いてあり、利用者の声を拾っている。

発言者 (敬称略)	発言要旨
長谷川 ラボ長	長岡造形大の授業の中でアイデア出しを行っていたこともつながっていると聞いている。

2) 各種発表に対する質疑応答（2日目）

発言者 (敬称略)	発言要旨
長谷川 ラボ長	はじめに渡邊先生にお伺いしたい。イスダス文明の話を興味深く伺っていたが、お店がベンチを外に出すことと行政がベンチを設置することの違いがあるのか、お考えをお聞かせいただきたい。
渡邊教授	第1世代のイスダス文明と第0世代のまちカフェとの違いから考えてみたい。先ほどまちカフェが衰退した理由を申し上げたが、第0世代の協力者に行ったヒアリングでは一部の方から「何のためにやっていたのかわからない」という声が聞かれた。 第0世代は「何とかまちを元気にしたい」ということで、飲食店ではない店も協力していたが、飲食店がやらなくなり、さみしくなったので「私もやめます」となった。 中心市街地活性化といっても、取りまとめ役が中活協議会、商工会議所だとして、商工会議所のキーパーソンが「こういうふうに行こう」と動いているかということ、それが見えない。例えば市、組合など様々な属性の関係者が個別に動いており、その人たちも「頼まれたから」みたいなところがあり、なんとなく意図があやふやだったという印象を受けていた。 長岡は山本五十六の出身地で、私自身も非常に尊敬しているが、彼の失敗から学んでいないのではないかと感じている。「失敗の本質」という有名な本がある。ミッドウェーをとるのか、艦隊をとるのか。「どちらも適当にやれ」という感じだったので、南雲中将が迷ってしまい、やられてしまったという話があるが、その失敗した南雲中将は生き残り、次のラバウルでも失敗の経験をフィードバックせずに、また負けたということがある。 第0世代はなんとなくフェードアウトしてしまい、イスは倉庫の肥やしになっている。そうなった理由をしっかりと分析し、次のためにどうやったらうまくいくかを考えることが必要である。 想定される理由として、担当者が明確でなかったことが挙げられる。あるいは行政が中心になっていると定期的に担当者が変わってしまい、その過程で引継ぎがうまくいかないと失敗の反省が出来ないということが構造的に潜在していることが挙げられるのではないかな。 一方「イスダス文明」は、まちなかカフェとは直接紐づかないが、「何か楽しそう」という感じのきっかけづくりができているのではないかと捉えている。 もう1つは、ああいうところにドキドキしながら座り、「変な人が歩道に座っている」とみられることが、むしろ快感であるという人が増えてくるような、そういうまちになって、「社会実験をまちなかでやっているんだ」「小さいことだけど、長岡はまちなかで社会実験をやることを許してくれるんだ」というようなニュアンスに変えられたら、イスダスが成功したといえるのではないかな。

発言者 (敬称略)	発言要旨
傍聴者 (中島)	私は大手通り商店街で青年部の会長をしており、中活の事業等々で、渡邊先生にはお世話になっている。 今、渡邊先生が仰っていたことを自分も感じている。このイスダス文明は学生が単年で変わるのも、主体をどこに置くのか。また、このプロジェクトだけでなく、様々な団体が長岡の中心市街地で活動しており、全部を取りまとめることは出来ないが、目的は共有されていたらいいと思う。しかし、その共有される目的が何なのか、イスダスの目的は何なのかというと、我々も把握していない。今までもビジョンの策定をしてきたと思うが、目標、目的、そのプロセスをどう捉えているのか。渡邊先生にお伺いしたい。 また、豊橋市の取組みの中で、「インキュベーション施設への補助がある」という話が出た。特に長岡のこの辺りは若者への施策が多いが、なかなか根付かないという肌感がある。その問題の一つに、何か事業を始めたとしても、家賃が高くて入れないということがあると思っている。それを柔軟に分割して入れるようにするなどして、受け入れられるようにする施策を、他の自治体ではどうしているのか伺いたい。
渡邊教授	イスダス文明探検隊は、授業として取り組んでおり、社会実験を通じて社会と交わり、学生が成長することが一義的な目的である。 中活計画は、法的に言うとは協議会で認定されてという形になると思うが、先日都市計画分野の教員でありながら、初めて学長の代理で中心市街地活性化協議会に出席した。4大学1高専の校長、学長があて職である。どんな議論をしているか、大学にフィードバックされる機会が少なく感じている。中心市街地活性化協議会はステークホルダーが一堂に会するという意味で大事ではある一方、実際のリアルアクターが「自分たちでこういう計画を立てたからやろう」と、なかなか届きにくいところがあるのではないかと。 例えば、中心市街地活性化協議会の議論の中で「誰もが元気になる」という表現を見かけることがあるが、この「誰も」とは誰を指しているのか抽象的であると感じている。我々が中活計画書を見て、それを翻訳して、「我々であればこういう使い方が出来る、こうやる」というプロセスがもう1つ必要ではないかと感じている。 中心市街地のステークホルダーはマインドセット的にはやや受け身である。積極的な雰囲気になかなか難しく、イスダス文明を触媒として、ステークホルダーの人のマインドセットが自分事になり、「少しでも自分で動かしてみよう」という小さな成功体験など、そういうことが出来てくれば、どういう会議体を作るか、どんなことをやろうか、次に動く可能性が1ミリでも前進するのではないかと。
研究生 (石川)	まちなかインキュベーション事業は補助金を交付している。まちなかで飲食店やサービス業、小売店を始めたいという方を対象に、商工会議所による相談支援体制との合わせ技で、どちらかの支援の網でとらえて相談にのりながら、物件探しと実際に補助をするということを行っている。飲食店を開業される方が主たる対象になっている。 一方で学生起業家をまちに溶け込ませていくか、家賃を払えるよ

発言者 (敬称略)	発言要旨
	うにしていくかは他の文脈で取組みを推進している。豊橋のまちなか、あるいは豊橋全域で起業された方への支援メニューの一環として、我々とは別の第3セクターが運営するスタートアップ支援施設、起業家支援施設においてメンターあるいはコーディネーター、支援員のような形で業務を委託することを通じて、若干ではあるが収入の確保を支援している。また成長してきた段階で、地域の自治体や企業、団体から、例えば SNS マーケティング講座の講師として仕事を受けるなど、徐々に独り立ちできるように支援を行っている。 学生起業家について、豊橋技術科学大学を卒業後に起業した方が何人かいるが、今ご紹介したような施設で仕事をもらったり、他のスタートアップ支援施設でコーディネーター業務、起業家支援プログラムの運営を委託する形で、成長のお手伝いをしているという側面がある。仕事をもらいつつ、その場所を仕事場、作業場として使える。 最近、いい変化だと思うのが、そういう場所で出会った方々が学生起業家に対して、物件の紹介や仕事の相談をするなど、の状況が生まれつつある。まちなかのインキュベーション補助金も、もう少し制度を弾力的に変えていったり、運営を見直したりすることで、学生起業家がまちなかにオフィスを構えやすくなるような仕掛けをしたいと考えている。来年度以降の予算、補助要綱を見直すことも含めて検討している。
傍聴者 (中島)	その補助金は、まちなかの空き店舗や空き家を活用してオフィス立ち上げることに活用できるのか。
研究生 (石川)	ご認識の通りである。
傍聴者 (中島)	若手の方、これからオフィスを立ち上げる方は、なかなか地域との関係性がないので、先ほどの話にあった「あなただったら少し安く貸してあげる」みたいな話にはならないのではないかと。そこを仲立ちする地域の人、まさしくコーディネーターが必要ではないか。地域の具体的な物件や場所、場をあてがう、すなわち場を案内するようなコーディネートできるような人材の方がいらっしゃるのか。
研究生 (石川)	少し説明が難しいところではあるが、行政や商工会議所がオフィシャルに主導するというよりは、起業家、まちの人とのネットワークを持つ方がいて、そうした方たちと有機的につながることでサポートしているのが実態である。
聴講生 (浅野)	私も石川氏と一緒に、豊橋まちなか活性化センターで非常勤という形で働いている。また、地元の都市ガス会社の執行役員、IT 子会社の社長でもあるため、私も起業家の卵の方とつながることを意識し、例えばサーラコーポレーショングループとして IT の仕事をそうした方々へ発注するように今心がけている。専門性を生かした仕事をアサインし、やりがいや地域の貢献を実感して、そういう輪を広げていくなかで、まちづくり DX につながればと考えている。 先ほど大林氏から「補助金や助成金に頼らず、どうまちづくり会社を自立していくか」という趣旨の発言があったが、私も会社の経営者として、収益事業をどう生み出していくかは、非常に大事なこ

発言者 (敬称略)	発言要旨
	とだと思っている。
長岡市 (松木)	渡邊先生への質問に係る点について、少し補足させて頂きたい。まちなかでは様々な主体の方々に取り組みを展開頂いており、関係者間で共有できるテーマ、目的が必要であるという点には同意する。 当市は中心市街地活性化基本計画を定めており、関係者間で共有したい内容を盛り込んでいる。一方で渡邊先生からもご指摘があったように、この計画でも「みんながつくるまちなかの価値」という、「みんな」や「誰もが」という表現を用いている。基本計画自体、基本的な仕立てがあるので、そこにのっとって策定すると、正直に申し上げると市民の皆様からすると読み取りやすいとは言い難いと思われる。 以前、渡邊先生からお伺いしたが、長岡造形大学の学生に対して、基本計画を読み込んでもらった上で「これを翻訳してください」という課題が出されているというお話をお聞きした。非常に示唆に富む取り組みだと捉えており、行政が策定した計画、方針を実際にまちなかで活躍するプレーヤーの方が理解しやすい形で翻訳していただくことで、共有が図られるとよいのではないかと感じている。
長谷川 ラボ長	翻訳するという取り組みは興味深い。これまで「ウォーカブル」というキーワードも出てきていたが、そういったイノベーティブな、皆がやりたいことというのが、「ウォーカブル」な空間で実現できると、実際に取り組んだ成果を「ウォーカブル」な空間で見せることで市民に説明でき、取り組みの効果や意義がと伝わりやすくなる。すなわち「ウォーカブル」な空間がショールームみたいな形になるというところで、やはり親和性があるのではないかと、皆さんのお話を聞きながら思った。 イスダスの話に戻るが、昨日の現地踏査でも現物を見たが、ノート取り組みは興味深く拝見した。ノートを置くきっかけ、経緯を教えてほしい。
渡邊教授	傍聴者の中にイスダス文明探検隊へ参加した学生がいるので、聞いていただきたい。
傍聴者 (水谷)	計画を検討していた段階で、渡邊先生が発言されたアイデアに着想を得て、気が付いたら実装したのではないかと。
渡邊教授	ノートは評判がよい。公共空間にノートとボールペンを置くだけで思わぬ効果がもたらされており、我々にとっても新しい発見であった。
長谷川 ラボ長	公共空間で実現できている点が面白い。 続いて秋葉氏にお伺いしたい。旭川市の広場条例の取り組みは、制度的な改革というところが、観点としてすごい斬新で面白いと思った。具体的な手続きを把握していないが、ほこみちをやろうと思うと大変なのか。だからこそ、ご紹介頂いたようなアイデアが生まれたということになるのか。
研究生 (秋葉)	道路空間を使う場合、警察に行って道路使用許可を取らないといけない、道路管理者のところへ行って道路の占用許可を取らないといけない。特に買物公園では、地元の商店街とイベントがバッティングしてはいけないので、空き状況も把握して、調整しなくてはならない。少なくとも3か所に行かなくてはならない。

発言者 (敬称略)	発言要旨
	広場条例を制定し、エリアプラットフォームが管理運営することでワンストップ申請で道路空間を自由に使えるようになり、エリアプラットフォームが個々と調整するという仕組みを目指している。 広場条例を制定し、さらに歩行部と広場部が明確に見てわかるように整備すると、警察からは「そこは通行できないエリアになるから、道路使用許可は不要になる」ということになる。まずは広場条例をかけ、少しずつハード整備を行うことで、完全なワンストップ体制を目指す方向で検討している。 札幌市北3条広場（愛称：アカプラ）という広場があるが、植樹帯で完全に仕切ること、真ん中は広場、両サイドは通路と一見してわかるように整備されている。そういう条例を制定したいと思っている。
長谷川 ラボ長	1つのイノベーションの形、法制度的なイノベーションの事例だと思う。

3) ディスカッション (2 日目)

<テーマ> イノベーションが起きやすい都市を目指すことの価値について

発言者 (敬称略)	発言要旨
長谷川 ラボ長	渡邊先生にお伺いしたい。まちなかでイノベーションを起こす要素をご紹介いただいたが、条件・要素として必要なことを教えていただきたい。
渡邊教授	人材組織、都市空間、つながりのうち、長岡市は行政ができる都市空間の整備はある程度進んでいると感じている。人材についても4大学1高専、企業等が立地している。 ミライエのイノベーションサロンで働いている人の様子を見ると、コラボレーションが生まれていない、個別に作業をしているという印象を学生は受けている。一方でアッセンブル長岡などの様子を見ると、いわゆる「ワイガヤ」している印象を受ける。両者の違いとして、空間のしつらえ、利用者同士を媒介するコーディネーターのパワーが挙げられるのではないかと。個人的には北陸、東北地方の方は少し内向的、アンオフィシャルな場でないかと心を開きにくいという印象を受けているので工夫が必要ではないかと。
長谷川 ラボ長	昨日アッセンブル長岡を見学した際に、吸音材の活用など、空間のしつらえの工夫があり、エリアで区切れるという強みがあると感じた。 研究生にお伺いする。イノベーションを起こすことの価値をどのように捉えているか、赤羽氏からお伺いする。
研究生 (赤羽)	庁内的にはイノベーションに対する機運は高まっておらず、市民とも価値観の共有には至っていない。個人的にはまちを変えていく一つのキーワードとしてイノベーションに着目しており、目指す方

発言者 (敬称略)	発言要旨
	向性としてとらえている。
研究生 (大林)	高山市は「種まき」のフェーズだと感じている。即効性を求めると一過性に終わってしまうため、100 やって2くらいアイデアが実装、実現するとしても、やりたい人たちが集まりやすいムードを醸成することが重要だと感じており、ビジョンの検討も含め、時間をかけて多様な世代を巻き込んで進めることが重要だと感じている。
研究生 (石川)	豊橋市内には技術科学大学の学生とコラボレーションして事業を展開するなど、いわゆるイノベーションに該当するような取り組みを行う方はいると思う。一方でメディアへ自己発信しない方が多い、自己肯定感が比較的低い方が多い印象を受けている。こうした方がいることを可視化し、種を広げ・育てることをつうじて、ネットワークを形成することが重要と感じている。
研究生 (片岡)	イノベーションとは、新しいものを作って生活に変化をもたらすと捉えると、私が取り組んでいることは「アナログ」だと感じている。日常的な挨拶、コミュニケーションを通じて、地域の価値を認識して広げることが重要だと感じている。
研究生 (秋葉)	2日間滞在し、ハブとなる人材の存在の重要性を認識するとともに、旭川市に該当する方がいるかと思うとややあいまいだと感じた。旭川市にも地域おこし協力隊はいるが、フリーミッション制である。相談窓口になるようなミッションを与えることも一つのやり方ではないかと感じた。
長谷川 ラボ長	人とのつながりをどうやって生み出すか、という意見が多いと感じた。日本におけるスタートアップの場合、渋谷や六本木に集まっているという「イメージ」「文化」が形成されている。こうした「イメージ」「文化」化に向けて、ビジョンを作り、継続的に取り組むことが重要だと思う。

<テーマ> 中心市街地を「イノベーション地区」とする取組みの優位性や潜在力について

発言者 (敬称略)	発言要旨
長谷川 ラボ長	イノベーション地区を目指してきた背景、変化について松木氏、渡邊先生にお伺いする。
長岡市 (松木)	市長は早い段階から「イノベーション」という言葉を使ってきた。バブル崩壊からの脱却に向けて、長岡版イノベーションを仕掛けることを意識づけしてきたと聞いている。 平成 24 年のアオーレ整備が一つのきっかけだと理解している。人が長岡駅とは別に集まるようになった。同じ時期の平成 23～25 年にかけて大手通りの再開発も同時に行われた。 上記の整備と並行する形で、まちなかで活動する民間団体の立ち上げ、活動の展開が目立つようになった。 現在の NaDeC BASE は、当初は近寄りがたい印象もあったのか利用は停滞しており、アッセンブル長岡も同じような様子だったと記憶している。一方で現在の様子を見ると、どちらの拠点も徐々に利用を通じて「色」がついてきたように、当初想定していた使い方

発言者 (敬称略)	発言要旨
	外の利用が見えるようになった。
渡邊教授	イノベーション地区は第1段階から1.5段階に移行しつつあると理解している。一方で学生に説明してもあまり認識はされていない様子であり、ブランディングが次の課題だと認識している。市民に共通したイメージを持ってもらえるように展開することが必要ではないか。長岡だからこそ面白いことができるというメッセージ、伸びしろを発信することが必要である。「Nagaoka with grobal」のように、政策的に空間だけではなく、戦略的なイノベーション創出を検討・展開することが第2段階にたどり着くのではないかな。
長谷川 ラボ長	施設ごとの性格に応じた使い分けを戦略的に行うことが重要ではないか。 研究生の皆様にお伺いする。現時点で若者が中心市街地にいるのか、滞在している理由があれば教えていただきたい。まずは長岡市からお伺いする。
長岡市 (松木)	昨日の現地踏査でもおわかりいただいたと思うが、まちなかで勉強する学生の姿が目立っている。アオーレでは勉強しつつ、SNSへその様子を投稿して交流する姿が目立つ。ミライエではグループで議論や勉強している。施設の混雑状況もあると思うが、利用者側の学生がその日の気分や目的に応じて使い分けているように見受けられる。昔から交通の結節点ではあったが、場ができたことで、居場所化し、滞在するようになったのではないかと感じている。 一方で家族で出かける先となっているかといえば、郊外のモールなどの商業施設と比べると、目的地としての優位性はやや劣ると感じている。
研究生 (秋葉)	高校生は通学の途中に旭川駅直結の商業施設のフードコート、買物公園周辺に立地しているビルの学習スペースなどに滞留している。そのほか、令和4年に完成した市役所新庁舎の食堂（一般開放している）でも勉強している姿をよく見かける。 まちなかに来る目的地があるとよいと思う一方、これまで実施した社会実験では公共空間にイスやテーブルを置くだけではなく、巨大ジェンガを設置したところ、老若男女が集う様子が確認できた。ちょっとした仕掛けでもよいので設けることが重要ではないかな。
研究生 (片岡)	宝塚市は大学がほとんどなく、核となる中心地もはっきりとしない。まちなかには子どもたちが勉強できる場所が少なく、利用の中心は高校生という印象である。 主催者が楽しいというイベントが重要である一方、若者を集ってもらうためには若者が主催者になってもらうことが必要になる。宝塚歌劇がこれまで人気を維持してきた背景には、親が歌劇のファンだとその子は親が熱中するものに興味を持つという連続性があるのではないかと感じている。親世代がまちなかで楽しそうにしていると、子どもたちもまちなかを楽しいと感じてもらえないのではないかと感じている。若者をいきなり巻き込むことは難しいが、徐々に若者が主体的に取り組めるよう働きかけ、年代を広げていくことが重要だと感じている。
研究生 (石川)	大学がまちなかにはないので、豊橋駅は通過点になっている。一方で、市内にキャンパスを有する大学と連携してまちなかのフィー

発言者 (敬称略)	発言要旨
	ルドワークを継続的に実施しており、研究実績が蓄積され、定点観測に役立っている。また、豊橋技術科学大学の研究会や学会をまちなかで開催してもらうよう働きかけている。そして、当社の協力会社が高校生などと連携して音楽イベント等を主体的に企画・運営しているとも聞いているが、宣伝不足を感じている。
研究生 (大林)	域外の若者は旅行で多く集っている一方、域内の若者はまちなかにほとんどいない。通学は自転車、バスなどを利用しているため、導線上、来る理由がないので理由を作る必要がある。行政も伝統的建築物を改装した拠点も整備しているが、近隣に暮らしているなど、一部の高校生などに限定されている。 これまでは商業の中心部という位置づけではあったが、新しいことができる、生み出せるという価値を感じてもらえる位置づけを検討することが重要ではないか。例えば高齢化は進展しているが、人生経験が豊富な方が多いと捉えることで、「エンジェルじいちゃん/ばあちゃん」ではないが、多世代交流を通じて何か新しい価値が創出できるような機能を仕掛けることが重要ではないかと感じている。もちろん、「誰が」それを仕掛けるのかも併せて課題だと思う。
研究生 (赤羽)	八王子市は大学が多い一方、中心市街地を経由しない土地に立地していることや、まちなかに滞在できる場所が少ないことから、「若者が少ない」と昔から言われている。ただ、令和5年にまちなかの一等地に「えきまえテラス」と命名した、暫定的な広場を整備したところ、若者が集まるようになっており、居心地のよい空間の力を視覚的に感じられるようになってきた。

<テーマ> イノベーション×まちづくり、中心市街地活性化を進めるにあたっての推進体制について

発言者 (敬称略)	発言要旨
長谷川 ラボ長	行政側の推進体制、職員のモチベーションの源泉について、自治体の立場からお伺いしたい。
長岡市 (松木)	推進体制、モチベーションについて、「縦割り」はネガティブに言われがちではあるが必要性もあると感じている。 長岡市は「中心市街地整備室」を設置しており、中心市街地全般に係る相談等の最初の窓口として位置付けている。もちろん個別課題によっては所管がどこになるのかということも生じるが、先ほどの研究生発表にもあったように「行政の都合を忘れる」ことが重要だと感じた。 モチベーションについては職員の意識変革が重要であり、何か新しいことを始めて、時には関係者からお叱りの言葉を受けることもよい経験だと感じている。
研究生 (秋葉)	モチベーションについて、もちろん組織的な目標、目的が前提としてはあるが、その実現に向けた手法、方策の部分で自分がよいと思ったこと、好きなことを反映できるように心がけている。
研究生 (赤羽)	位置づけとしての計画づくりが最初に必要となる。一方、実態として各所管で個別に計画を策定しており、連携・連動が十分に図られていない。連携・連動のきっかけとして、大きな方向性を共有し

発言者 (敬称略)	発言要旨
	ている行政以外のプレーヤーや共創パートナーとの連携を図る中で、市内連携の必要性を外部から指摘いただくことで、関係部署を巻き込みたい。
長谷川 ラボ長	民間の立場からもお伺いしたい。
研究生 (大林)	自分事にできるかに尽きる。そのためには地域にとってだけではなく、自分にとってのメリット（リターン）を求めることも必要ではないか。
研究生 (石川)	豊橋市では都市利便増進協定を結んで広場管理を行っているが、対象となった広場は複数の部署が関係する場所だったようであるが、行政内で上手に調整できる職員がいたため、円滑に展開できている。場合によってはプロジェクトの中で連携している民間のプレーヤー（第三セクター、NPO 等）が行政職員同士を結び付けることも一案ではないか。
研究生 (片岡)	「市民がやりたいことを実現する」を前提として、時として所掌事務を超えて取り組むこともある。その場合に、関係部署からおしかりを受けることもあるが、相手の部署の事業を阻害しない範囲において、所掌を超えることも重要だと感じており、必要に応じて上長に調整を図ってもらう、責任を取ってもらうこともお願いしている。仕事とプライベートの境界をいい意味で「あいまい」にすることも重要だと感じている。

4) ディスカッション後の質疑応答（2 日目）

発言者 (敬称略)	発言要旨
聴講生 (宮本)	テーマ 1 に関連し、渡邊先生と松木氏にお伺いする。学生が自ら進んでプロジェクトを展開しているということであるが、彼らのまちなか、長岡市に対する感覚の変化があれば教えてほしい。 また、市内の創業が増えていると思うが、市民の中心市街地、イノベーションまちづくりに対する印象を教えてほしい。
渡邊教授	今日は学生が参加しているので彼に聞いていただきたい。
傍聴者 (水谷)	私は奈良県出身で、大学進学とともに長岡市に来た。最初は「知らない」「アウェイ」と感じていたが、イスダス探検隊の活動を通じて、知り合いが増えて、まちに対する愛着は地元と同程度と感じている。
渡邊教授	自分事になっていない、例えば単位目的で参加している学生は愛着が醸成されない。ある意味、自習スペースで学習している中学生や高校生が「誰も」の場所ではなく、「私」の場所と捉えてもらえる、愛着を醸成するための仕掛けが必要である。
長岡市 (松木)	第 4 期計画策定にあたり、市民アンケートを行ったところ、前回のアンケートと比較して、まちなかがよくなっていると感じる方が微増したことが把握されている。 肌感覚的には、まちなかですれ違う学生の声を聞くと、「ミライエに行こう」という声を聞くことが増えた。また、現在ミライエ東

発言者 (敬称略)	発言要旨
	館を建設中であるが、出店を希望する事業者もいる。
聴講生 (橋本)	私の悩みも込みでお伺いする。まちづくりに目的が必要なのか、と自身に問うことがある。イノベーションという観点から考えると、「やってみたい」「楽しい」というモチベーション（動機）がまちを形成するのではないかと感じる。バランスの問題なのかもしれないが、どのようにビルトインしたらよいのだろうか。
長谷川 ラボ長	都市計画の観点に立つと、楽しい、儲かるを無作為に認めると無秩序になってしまうので、安全、住みよさを前提として、楽しいことを実現するための制度作りが必要になる。 イノベーションを目指すプロセスは研究にも似ている。研究計画を立てて研究を進める中で、当初は想定していなかった発見があり、それが面白い。まちづくりにおいてもビジョンに基づいて取組みを進める中で、思わぬ方向に波及、発展することがイノベティブなまちの一つの価値として捉えられるのではないかと。
渡邊教授	これまでの都市計画は「成長」を所与としてきており、その発想は抜け切れていないと感じている。人の交流、産業創出を促すイノベーション（新結合）を目指すとするれば、法体制が追い付いていない中で創意工夫を凝らしている。 箱だけではなく、自分事とするためには、やや「強制」（主体的に考える立場に置く）することも大事ではないかと。
内閣府 (羽白)	個人的なコメントとしてお話ししたい。（先ほど渡邊教授より中活協についてのお話があったが、）国は制度の外形を整える一方、個別の中活協が意味ある議論となるかは参画者同士の意識、自分事となっているかが問われるのではないかと。 目的の議論も行われたが、個別のユニークなまちの未来、理想は求められるところであり、行政だけではなく多様なプレーヤーと作り上げることが重要ではないかと。